

本年度は中期計画の最終年である95年に向けて意欲的に事業・組織・経営の全てを「刷新」し、「挑戦」し、95年は全く新しい地平に、労協・労

協Gを置くことになるように奮闘すること、それが今総会が定めた方針だろう。

中田宗一郎（労協連合会・専務理事）

◎センター事業団だより

センター事業団の第9回総代会を知床で行った。事業高54億、組合員1901人、11ブロック60事業所というのが現在のセンター事業団の数字である。正味1日の総代会で十分な議論が保障できないのが理事会の悩みである。①93年度のまとめ②93年度決算③監査報告④94年度方針の他3つ特別議案が提案された。昨年はセンター事業団設立以来という悪い経営状態を下半期の事業所ブロックの厳しい経営努力で何とか配当が出せるまでに盛り返すことができた。全団員を組合員に！という定款改正の意義は大きかったと評価している。映画「病院で死ぬということ」の上映活動、高齢者協同組合、新規事業への挑戦、全組合員経営や良い仕事の実践などが参加した総代から生き生き報告され、事業・運動の年々のひろがりや様々な人々からの期待を全国の仲間が実感した。永戸専務いわく「基本に徹し、くじけず、足早に」というのが今年の特徴になるだろうということである。良い仕事の崩れは論外である。総代会で明らかにされた方針に今年も全力で臨まなければならない。夜の交流会では地元アイヌの方々や沖縄からサンシンを持ってやってきた仲間との楽しい歌と踊りが舞台を盛り上げ、永六輔さんが20年ぶりに作詞したという「はるなつあきふゆ」を参加者全員で合唱した。会議のスケジュールが過密で知床の大自然を充分満喫できなかったのは残念だったが、一味違った思い出深い総代会となったようだ。

事業所ブロックでは6～8月の取組（①第3次自治体集中行動②良い仕事の自己点検・相互点検運動③映画・高齢者協同組合の組織化④増資運動）が始まり、総代会の報告や94年度の事業計画の補強など忙しい日々が続いている。映画の取組では酒田市の上映会が1000人近い参加で成功して

いる。東京葛飾の上映会も地元の方々の積極的な取組で、高齢者協同組合へつながる人のネットワークが作られ始めている。映画の取組が今年も運動を広げる牽引車の役割を果たしている。

本部では総代会の成果の上にとって94年度の獲得課題を鮮明にするための第1回ブロック本部長会議を合宿で行い、100億の事業高にめどを立てること、全組合員経営に徹することなど意思統一をした。更に94年度の「機構と人事」が第1回事業所長会議に向けて固められている。新しい任務につく所長、事務局員が慌ただしく異動となるのもこの時期からである。今年は35人の新事務局員候補の配属もあり、役員クラスの異動は少ないものの相当顔触れが変わってきた印象を受ける。本部に1年間いた去年の新人2名も新たな任務で異動していった。一人は仙台岩切事業所の所長として、もう一人は秋から始まる予定の新しい仕事につくため鶴岡医療生協で研修を受けている。1年は短いようだが若い事務局員を大いに鍛え成長させているようだ。

今年も新卒採用の季節がやってきた。ここ数年は5月から始めていたが、今年は6月からにした。就職戦線に薄日などと書かれ始めているが、1月ごろから届く資料請求のハガキは4000通を越えた。去年の3倍である。返信の宛名書きも大変である。1通のハガキが素敵な出会いをもたらすかもしれない。おろそかにできないところである。会えるものなら全ての人に会って労働者協同組合の説明を行いたいと思うが、物理的に限界にきている。説明会参加のために事前にレポートを課すなど、例年ない強硬手段で今のところ何とか人数制限に成功している。

坂林哲雄（労協センター事業団・事務局長）